『一九八四年』と技術

Nineteen Eighty-Four and Technology

福西　由実子
FUKUNISHI Yumiko

中央大学 商学部 教授

バーミンガム大学大学院歴史学研究科MPhil課程修了。東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻（表象文化論）博士課程単位取得満期退学。ロンドン大学クイーンメアリーカレッジ歴史学研究科客員研究員（2018-2019）。中央大学商学部助教，准教授を経て2020年より現職。専門は現代イギリス文学・文化史。

日本技術士会会員の皆様，はじめまして。中央大学の福西と申します。普段は学生に英語や英文学，イギリス消費文化論などを教えております。私の研究領域は20世紀英文学・文化史なのですが，このたび，思いがけないご縁で巻頭言の執筆を仰せつかり，どのような内容が良いかと思案しまして，自分の関心にあえて引き寄せ，「英文学と技術」，もう少し具体的には「『一九八四年』と技術」というテーマで書かせていただこうと思います。

『一九八四年』は，イギリス人作家ジョージ・オーウェル（1903-1950）が1949年に発表したディストピア小説です。ディストピアとは，理想郷を意味するユートピアの対義語で，「どこにもあってほしくない恐ろしい世界＝暗黒郷」をさします。文学では近未来の管理社会を風刺的に描くことが多く，本作も「未来に対する不安」を具象化した予言的な作品として知られています。独裁者「ビッグ・ブラザー」が君臨する架空の国オセアニアを舞台に，思想・言語などあらゆる国民生活に統制が加えられ，一切の情報や歴史は「真理省」によって改竄され，国民の行動はテレスクリーンによって絶えず監視される様が描かれます。

この作品は発表されてから72年経った今も，世界中で読み継がれています。例えば米国では2017年のトランプ大統領就任以降，彼の政治手法と『一九八四年』で描かれるビッグ・ブラザーの独裁体制との類似を指摘する声が高まり，ベストセラーになりました。フランスでは2020年にマクロン大統領が夜間外出禁止令を発令した際，不当にコロナ禍の状況を隠蔽し行動制限を強いているのではとの疑念の声とともに『一九八四年』からの引用がSNS上に溢れました。その後も英仏ではロックダウンが実施されるたびに「Covid 19-84」が抗議の象徴としてアイコン化されました。日本でも，2021年1月に実施された大学入学共通テストの世界史Bの問題に採択され，主人公の真理省での「歴史記録を改竄する仕事」を軸に，歴史的事象だけでなく，現代社会における組織的改竄の問題を考えさせる内容となっていました。

人工知能（AI）やドローン，監視カメラといった「技術」が急速に進歩する昨今，『一九八四年』とそれらを関連付けて，正面から警告を発する企業経営者もいます。2021年5月，マイクロソフトのブラッド・スミス社長はBBCのインタビューに答え，『一九八四年』のディストピア的ヴィジョンが2024年には現実のものとなるかもしれないと述べました*1。氏は中国の「天網」を例に挙げ，AIを用いた市民監視の仕方，つまり国家支配のあり方が，プライバシーや人権を侵害し，民主主義を脅かす可能性があるという強い懸念を示しました。その上で，各国政府は，それぞれの国民を守るべく，AI技術の使用を規制する法律を制定すべきだと訴えました（ちなみに，2020年末の時点で，日本は監視カメラの設置台数で世界第5位。1位は中国，2位は米国，3位はロシアだそうです）。

『一九八四年』には，いつの時代にもあらゆる支配機構が内包しうる危険性が，近未来小説の形をとって提示されています。技術士と英文学者。私たちは普段の専門や関心領域こそ異なりますが，オーウェルの小説世界そのもののような社会のありようへの問題意識と危機意識を，これからも共に持ち続けていくべきではないでしょうか。

＊1：'Microsoft president: Orwell's 1984 could happen in 2024'（https://www.bbc.com/news/technology-57122120，2021年9月30日最終閲覧）